
聖光の吸血鬼

蒼歌 嵐雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖光の吸血鬼

【Nコード】

N6411Z

【作者名】

蒼歌 嵐雪

【あらすじ】

普通の音大生、蒼空 深琴は、ある日豎琴を持ちながらトラックにはねられそうな少年を助け自らが死んでしまう。無念たつぷりの深琴は自称カミサマにボーナス付きで転生させられてしまった。

ヴァンパイアの同族がいない異世界で気ままに旅をする冒険紀。

R、15は保険です。毎日投稿を目指してます。

プロローグ 『沈みゆく意識の中で』 (前書き)

初投稿です。

まだまだ未熟なものです、
よろしく願います。

プロローグ 『沈みゆく意識の中で』

薄れゆく意識の中で、蒼空深琴は思った。

死ぬのかな……。次に目覚めるときは幸せにしてください。
家族も、友達も、恋人も全部…………。

…………あれ？…………ここはどこだろうか。

「この世とあの世の境目じゃよ」

「それっ！！」

「ゴフッ！…………お主、カミサマに向かって何をするのじゃ！」

あ…………反射的にやっちゃったよ。
というかなんでここにいるんだ？僕は確か…………。

「お主はトラックにはねられそうになった少年を助け、自らが犠牲になって死んだのじゃ。」

そうだ！…………死にたくなかったなあ。
って誰だよ！それに何で心読んでるんだよ！

「カミサマじゃ！他のことはノーコメントじゃ。」

使い方違くないか？…………教えるよ！

「 蒼空深琴 男 17歳 音大生 趣味：豎琴 ……女っ
ばいな 」

「 くらえっ！ 」

「 そんなくらい避けれるわい。 ……さっきのは不意打ちだ
からじゃぞ？ 」

ちっ ……今の状況を整理しよう。

僕は死んだ。そして今自称カミサマと対面中だ。
そして多分用件があるんだろうなあ。

「 舌打ちするんでない！自称でもないわい！ ……だがしか
しそれ以外は正解じゃ。お主には異世界へ転生してほしい。 」

… … やっぱこのパターンか。

多分あの子は天使とかそういうことか。

「 予想通りだったかい？それなら話は早い。みんな正解じゃ。特
別に君には自身の設定も決めさせてあげよう。特例じゃぞ？ 」

わかった、それ以外に道はないだろう。

その代わり、バランス崩壊しない程度に強くさせてもらう。

「 分かった。レスター、マネキンと設定紙を。 」

「 お持ちいたしました。レヴェル最高創生神様。 」

あの少年だ。仕事早いなあ。

しかしあの人本当に偉いんだ。

「このマネキンはおぬしの容姿を設定できる。設定紙はその名の通り設定だ。後はお主に任せたぞ。」

まあバランス崩壊しない程度にやりますか！！

しかし深琴は気づいていない。

設定を決めるといふのはとても大変で、

面倒くさいから神様が放り出したただけだということに……………。

ふう、こんなもんだな。

名前はエツツエル・デイリーン

セイント・ヴァンパイアという昼型の希少な吸血鬼で、

時空と魔力の歪みから生まれ出された。

髪色は薄い蒼色で瞳は濃いブルー。

中世的な顔立ちで背も男子にしては低め。

頭がよく、魔法と楽器の才能があり、動物に好かれる。

その他etc.

「……………感激じゃ。こんなに短時間で設定を終わらせるなんて……………」

昔から頭と情報処理能力はよかつたなあ。

「それにしても……………。だがこれだけじゃ心配だからこのガチャガチャを3回回せ。」

それでも心配ってどんな世界だよ……………。
まあやるか。ガチャガチャガチャ。
えっと、念話と想像具現と魔術付与……………てこれは？

「お主にボーナスじゃ。心配なのでな。」

まあいろいろお世話になりました。
これからはエツツエル＝デイリーンとして生きていきます。

「最後の最後でそんなこと言うでない。これから先は一人だ。しかしくじけてはいけない。おぬしが死ぬ間際に思ったように。幸せが待っているの。さらばじゃ。エツツエルよ。」

床が光る。そこには不思議な模様が描かれて……………。

そこで意識は強制的にシャットダウンした。

ブローグ 『沈みゆく意識の中で』 (後書き)

お楽しみいただけただけでしょうか？
感想待ってます

第1話 朝日と言つ名のレーザービーム（前書き）

投稿しました。

ヴァンパイアってありきたりでしょうか？

第1話 朝日と言う名のレーザービーム

目が覚めると酷く疲れたような気がした。

いや、気のせいではない。確かに疲れている。

なぜだろう、深琴ことエツツエルは考えた。

いや、当たり前のことだが、ヴァンパイアは陽の光に弱いのだ。

エツツエルは気づかない。いくら頭が良くたって根は天然と言うか馬鹿と言うか……………。

「まぶしい……………。ん？まぶしい……………。？ってことは…………光か。」

納得した様子のエツツエルだが、自身の考えた設定に感謝すべきだ。

セイントⅡヴァンパイアは光に少しだけ耐性がある。

まあ、だからわざわざそうしたのだが。

「まあ、まず能力の確認と行きますか。」

念話は、人がいないのでためしようながないし魔術付与も魔術が使えない。

ということは自動的に想像具現になる。

想像すれば具現化する、それだけだとカミサマから聞いていた。

（ 石ころでできた剣でてこい！ ）

欲は少なめにしたほうがいいと思い石ころの剣を想像する。

カラン・・・・・・・・・・。

本当にただの石ころの剣が出てきた。

「 魔術の使い方知らないや。どうしようかな？ 」

『 ふふふ、わしを忘れてないか、このわしを。 』

「 ああ、カミサマ。忘れてたよ。 」

『 ガーン、ショックじゃ・・・・・・・・。とにかくこれが念話なのじゃ。 』

「 この脳に直接語りかけてくるような変な感じがねえ。でもこれは僕はしゃべってるよね？ 」

『 そうじゃからまず念話の練習を・・・・・・・・エッツェル、魔獣が来た。 』

「 やばい！ 僕戦えないんだけど。 」

今更ながらエッツェルは全裸である。

『わしは助けぬ、初戦鬪は自力でのゝ。』

「なんでだよ!?!?.....でも考えないと死ぬんだ。考える
考える考える!?!?!」

光で体力も減ってきている、狼型の魔獣はどんどん迫ってきている。

「.....僕は動物に好かれやすいんだ。カミサマ!魔獣
も動物かな?」

『あたりじゃ。しかし強い魔物ほど襲ってきやすくなるからの。
注意じゃ。』

エツエルはじりじりと魔獣に近づいていく。そして魔獣はへたり
込んだ。

「よしよし、お前可愛いなあ。」

「クウーン。」

『と言うかお主全裸だから想像具現で服作ってくれ。』

「あああああああああああ!?!?!?!?!」

結構なバ力である。

「ベストにマントに下着に靴にズボンと、こんなもんかな？」
エツエルが作ったのは、漆黒のベストと背中に蒼炎が縫われている蒼色の蒼炎のマント。
普通の下着に蒼いズボン、黒みがかった青い靴と、蒼黒ばかりである。

『かつこいいのお。ひゅーひゅー！……最後に一つだけじゃ。』蝙蝠生成』と言うと、おぬしの部下達の蝙蝠が生まれる。最初の一匹だけ大人じゃがそれ以外は一から育てることになる。この世界のことは大人コウモリに聞け。さらばじゃ。』

「カミサマ有難うー。」

棒読みである。

もう返事は返ってこなかった。

「よし、『蝙蝠生成』」

白い煙が立ち上る。涙が出そうになり目をつぶった。

もう一度眼を開けると、そこには……………。

蒼く輝く一匹の蝙蝠がいた。

第1話 朝日と言つ名のレーザービーム（後書き）

作者 「 微妙な終わり方だね。 」

エッセル 「 しょうがないよ。区切りが悪いもん。 」

作 「 執筆がんばります！ 」

エ 「 ファイト（ｗｗｗ） 」

作 「 何だよそれ。 」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6411z/>

聖光の吸血鬼

2011年12月21日22時53分発行